

令和 3 年 5 月 10 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02944

研究課題名(和文)6年制薬学生のための英語コミュニケーション能力開発研究

研究課題名(英文) Research into Improving the English Communication Skills of Student Pharmacists in the Six-year Curriculum

研究代表者

金子 利雄 (KANEKO, Toshio)

日本大学・薬学部・教授

研究者番号：20185929

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：2017年、全国私立薬科大学での英会話教育に関するオンラインアンケート調査を行った。2018年、英米の薬科大学での臨床薬剤師教育の現地調査を行った。2019年、それらの調査を基に「パイロット版 薬学生のための英語会話」教材を開発した。2020年、2021年、コロナ禍のため日本薬学会大会での発表が叶わなかったが、パイロット版教材を1年間授業で使用し、改善を加え、2021年2月12日に同教材の正規版を薬学生に向けて出版することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「薬学生のための英語会話」教材開発は、6年制薬学教育が求める技能を満たすものである。教材開発のコンセプトは、薬学準備教育ガイドラインの中の「聞く・話す」能力に準拠しており、臨床現場の薬局、ドラッグストア、病院薬剤師に必要な英会話表現を集約したものとなっている。

開発にあたり、米国、カナダの臨床薬学教育に精通した薬学専門教員、日本薬学英語研究会(JAPE)の会員、並びに臨床薬学教育に携わる15名の専門教員による協働作業により開発目標を達成することができたことは、6年制薬学教育に寄与し、将来に向けてより高いスキルを持った薬剤師を輩出することができるという点で、その意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：In 2017, the online questionnaire was implemented among the private pharmacy schools all over in Japan. In 2018, to examine the clinical pharmacy education in the U.S. and U.K., several schools were chosen for field study. In 2019, based on those preceding research, the pilot version of the text, English Conversation for Student Pharmacists, was developed.

Both in 2020 and 2021, Covid-19 prevented us to join the presentation at Pharmaceutical Society of Japan. However, it was fortunate to publish the refined complete textbook in February 12, 2021 after the pilot version was tested in class for a year.

研究分野：英語教育(ESP)

キーワード：薬学英语 薬学英会話 臨床英語

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 平成18年、学校教育法が改正され薬学教育は6年制へ移行し、薬学教育モデル・コアカリキュラムに基づく教育が始まり、薬学教育評価機構が実施する第三者評価が6年制薬学教育プログラムの内容を評価し、教育の質保証を担保する役割を担うこととなった。英語教育は薬学準備教育ガイドラインに例示された内容に準拠した学習の質を評価され、その例示内容は研究志向が色濃く残る目標であった。したがって、英語教育は学術論文を読み、書きできる学生の育成に目標が置かれた。

(2) 平成25年、改定版薬学準備教育ガイドラインが制定され、臨床薬剤師育成が基本理念となり、英語教育においても、臨床現場で求められる英語、とりわけ、聞く・話す能力が鮮明に示され、薬学アドバンスト教育ガイドラインに例示された実用薬学英語に取って代わることとなった。

2. 研究の目的

(1) 臨床薬剤師育成を掲げる6年制薬学教育にあつては、国外から来日する患者・顧客に英語でコミュニケーションがとれることは薬剤師にとって重要な資質である。その目的を達成するために、平成17年、東京近郊の薬科大学英語教員5名により日本薬学英語研究会(JAPE)を組織し、教育現場に不足していた薬学英語教材の開発に取り組み、10冊の教材を世に出してきた。

(2) 既存の10冊の教材は、6年制薬学教育での英語教育に寄与してきたが、「読み」「書き」「聞き」「話す」4技能の育成を目的とした内容であり、読解力の育成に重点が置かれる傾向があった。

(3) そこで、薬局、ドラッグストア、病院で勤務する臨床薬剤師に必要なコミュニケーション能力の育成を狙いとした、「聞く」「話す」技能に特化した教材開発が急務であると判断し、研究のビジョン(大義)が定まった。研究課題名は「6年制薬学生のための英語コミュニケーション能力開発研究」とし、平成29年度、科研費基盤研究Cに採択され、研究のビジョンを具現化するためのスタートラインに立つことができた。

3. 研究の方法

(1) 平成29年、最初に取り組んだ基礎研究は、日本全国の私立6年制薬科系大学において、どのような英語教育が行われているかを調査するためのオンラインアンケート調査の実施である。アンケート調査内容は、英語科目開講数、開講科目における「読み」「書く」「聞く・話す」の割合、進度別クラスの有無、クラスサイズ、担当教員の身分、担当教員の母国語、ネイティブスピーカー教員の専門、会話科目の目的、会話テキストの名称、会話教材で取り上げてほしいトピック、場面、ターゲット等である。32校から回答があり、教材開発の必要性を再確認できた。一番の収穫は、臨床現場で必要とされる会話表現の提示と日本人教員でも扱える教材作成であるべきだということである。このことが確認できたことはアンケート調査に真摯に回答してくださった回答者に負うことが大である。

(2) 平成30年に取り組んだ基礎研究は、英米の薬科系大学、薬局、ドラッグストア、病院を訪問し、臨床薬剤師が話す英語を修得することである。訪問にあたっては、研究分担者(ネイティブ教員)が任に当たった。米国では、南カリフォルニア大学、チャップマン大学の薬学部教授との面談、ロサンゼルス市の薬局、病院、オレンジカウンティのドラッグストア、病院、薬局訪問を通して、患者・顧客とのコミュニケーションの進め方等を見学させていただいた。その後、英国へ移動し、提携大学のポーツマス大学理学部医療薬学科の教授との面談、市内のドラッグストア、薬局、小野薬品工業ロンドン支店、ウィンチェスターの病院、ロンドンの王立薬剤師会を訪問し、英国での薬学教育の実情ならびに臨床現場を数多く視察させていただいた。一番の収穫は、イギリス英語とアメリカ英語の表現の違いだけでなく、同じ成分の薬に対し名称が異なっている用いられていることを確認できたことである。これらの違いを教材開発にどのように反映させるかの方策を考えることができたことは予想外の収穫といえる。

(3) 研究の最終年度に当たる平成31年(令和元年) 先の先行基礎研究を念頭に置きながら、「6年制薬学生のための英語コミュニケーション能力開発研究」を具現化させる教材開発に着手した。教材の根幹となる拠所が揺らがないように、平成25年に改定された薬学準備教育ガイドラインの(3)薬学の基礎としての英語、G10 薬学分野で必要とされる英語に関する基本的事項を修得する。【聞く・話す】1.英語の基礎的音声聞き分けができる。(技能)、2.英語の会話を聞いて内容を理解して要約できる。(技能)3.英語による簡単なコミュニケ

ーションができる。(技能・態度)4.科学、医療に関連する代表的な用語を英語で発音できる。(技能)を開発の根幹に据えた。「薬学の基礎としての英語」「薬学分野で必要とされる英語」とは何かの答えとして、臨床薬剤師に必要な英語と解釈し、薬局、ドラッグストア、病院で働く薬剤師が外国人患者、顧客とのコミュニケーションに役立つ英語会話力の育成に特化した教材を作成することとした。

4.研究成果

(1)教材開発にあたり、薬局、ドラッグストア、病院の臨床現場での外国人患者・顧客とのコミュニケーションに精通した臨床薬学教員として、海外の Pharm.D.プログラムに詳しい2名の専門教員を協力者として加わっていただき、各場面でのダイアログを作成していただいた。それを補助するものとして、役に立つ様々な表現をまとめた Useful Expressions、専門用語の正しい発音を身につけるための Pronunciation Practice、聴解力を確認するための Dictation、速読力を訓練するための Reading Comprehension、短い文章を聞き取り理解する Listening Comprehension、場面に応じた対話を自ら作成する Make Your Own Dialog、各 Unit に関連する発展的な情報を紹介するために15名の臨床薬学教育教員による Column、そして薬剤師の活動の場を海外に求める高い志を抱く薬学生たちのための米国・カナダの薬学教育事情、同一医薬品に用いられる英米の名称の違いをまとめた Appendix を盛り込み、「薬学生のための英語会話(東京化学同人)」のパイロット版を完成させた。

(2)令和元年、教材開発を終え、その成果を日本薬学会第140年大会(京都)で発表する計画であったが、コロナ禍のため大会は中止となり、研究期間の延長を余儀なくされた。研究発表は、令和2年度の日本薬学会第141年大会(広島)に持ち越しとなったが、その間、パイロット版を1年間かけて日本大学薬学部の英語会話・英語会話の授業で試験的に使用し、修正箇所、改善点を探るトライアルを行った。日本人教員でも扱うことができることを考慮して、Teachers' Manual の作成、スタジオでのネイティブスピーカーによる音声録音を行い、教材利用者は出版社のホームページからダウンロードできるようにした。

(3)パイロット版は、総勢28名の研究協力者により完成することができた。最終年度の教材、TMの校正作業は難航した。28名の執筆者のそれぞれの思いで執筆された原稿に統一性を持たせることに最終年の全てを費やすこととなったが、令和3年2月12日、正規版「薬学生のための英語会話」(東京化学同人)を発行することができた。この成果物は、現在、薬科系大学の英語会話テキストとして数多くの薬学生に活用して頂いている。薬学臨床現場での英語会話に特化した教材は、国内外でも稀有であり、6年制薬学教育への貢献度は高いものと自負している。このような機会を与えていただいた科学研究費制度に深く感謝申し上げます。

(4)コロナ禍の収束がままならず、予定していた日本薬学会第141年大会(広島)での発表が実現できなかったことは大変悔やまれることです。研究代表者は、研究の最終年度をもって、退官することになりましたが、薬学界の将来を担う薬学生が、本教材を活用し、英語コミュニケーションの技能と態度を修得し、医療人としての厳かな責任感とプロ意識をもって活躍してくれることを心から願っています。最後に、本教材は産声を上げた赤子のようなものです。後進の研究者が、本教材を時代に則した内容に改め、改善させてくれることを切に願っております。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 金子利雄
2. 発表標題 JAPE and English Education for the Six-Year Schools of Pharmacy in Japan
3. 学会等名 2018 ALAK International Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金子利雄、Eric M. Skier, 板垣正、堀内正子、玉巻欣子
2. 発表標題 英語コミュニケーション教育の現状と課題 科学研究によるアンケート調査を基にして
3. 学会等名 日本薬学会第138大会(金沢)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 金子利雄	4. 発行年 2019年
2. 出版社 (株)東京化学同人	5. 総ページ数 125
3. 書名 パイロット版 薬学生のための英語会話	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	E・M Skier (Skier E.M) (90339101)	日本大学・薬学部・准教授 (32665)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------